

第3章 土器—年代のものさし—

古墳時代中期になると、日本列島で須恵器が作られるようになります。須恵器は、「年代のものさし」として極めて有効です。なぜならば、須恵器は生産地ごとに細かな形態の違いこそありますが、弥生土器や土師器と比べると画一的で、おおまかにいえば、同じ時期の同じ器種は、みな同じような形をしているからです。

また、須恵器は広い地域に流通していて、圧倒的に「出土しやすい」資料です。このような理由で、古墳時代中期以降の遺跡や古墳の年代を探る際には、とりわけ須恵器が注目されます。

「年代のものさし」として有効な窯跡出土の須恵器のなかで、全国的な基準となっているものが、大阪府陶邑窯跡群から出土した須恵器です。

この章では、各時期を代表する窯の須恵器のなかから、特に時期ごとの変化が分かりやすい蓋坏・高坏・甕・甗に重点を置きながら紹介していきます。